

19世紀パリにおけるキャバレーと新聞

吉田 正明

序

文学作品とは異なり、大衆文化としての性格を持つシャンソンに関しては、これまで本格的な学術研究はそれほど進展しているとは言えない。2004年にフランス国立図書館が「20世紀シャンソンの回顧展」を開き、Bertrand Bonniex, Pascal Cordereixなどの専門職員の努力により、シャンソン関連の諸資料・文献の整理と目録作りが進められ、シャンソン研究の基盤がようやく整ってきたところである¹⁾。

フランスにおけるシャンソン研究の動向は、リモージュ大学の *Espaces Humains et Interactions Culturelles (EHIC)* 第一部門「民衆文学研究センター」*Centre de recherches en littérature populaire*²⁾、「学際的シャンソン研究セミナー」*Séminaire interdisciplinaire de la chanson (SIC)*、あるいはモンペリエ第3大学の *Elisabeth Pillet, Marie-Eve Thérénty* が主催する *Centre de recherche RIRRA 21* などにおいて新進気鋭の研究者が学際的なシャンソン研究に従事し始めている。

日本においては、シャンソンの学術的研究はいまだ立ち遅れていると言わざるを得ない。シャンソン歌手や歌詞を紹介しているものなどは多々見受けられるが、いずれも学術的研究水準に達しているとは言い難い。

一方、19世紀における出版物の研究に関しては、*Dominique Kalifa, Philippe Régnier, Marie-Eve Thérénty* などの研究グループが優れた研究成果を挙げ始

めており³⁾、日本では小倉孝誠などの研究を挙げることができよう⁴⁾。

筆者は、これまで科研による研究「近代フランスにおける文芸シャンソンの諸相と文学との交錯」(平成 22～24 年度基盤 C, 研究分担者: 三木原浩史)及び「文芸キャバレーにおける文学とシャンソンの影響関係」(平成 25～27 年度基盤 C, 研究分担者: 三木原浩史)に従事し、19 世紀中葉から 20 世紀中葉にかけてパリのキャバレーやカフェ・コンセールにおいて隆盛したシャンソニエや歌手たちの実態を調査研究し、文学者や芸術家との交流を通じてモンマルトルを中心に発展した文芸シャンソンの諸相と変遷を明らかにしようと努めてきた⁵⁾。

これらの研究を進める中、パリでの現地調査で 1903 年創刊のシャンソンを扱った週刊誌『歌うパリ』*Paris qui chante* を多数 (1903～1909 年) 入手することができた。これは当時ベルエポック期のカフェ・コンセールで活躍した人気歌手 (メイヨール, ポラン, ドラネム, ファジェット等) の持ち歌を歌詞と楽譜のみならず、歌手のイラストや写真をふんだんに鏤めて紹介したもので、彼ら・彼女らの舞台での歌芸の様子が手に取るように分かる貴重な資料である。この週刊誌の調査研究により、それ以前、すなわちカフェ・コンセールが作られ始めた 19 世紀中葉からモンマルトルを中心に文芸キャバレーが隆盛する 19 世紀後半にかけて、当時の出版物 (新聞, 雑誌, 定期刊行物等) とシャンソンとの関係は果たしてどのように取り結ばれていたのか、また、その関係はカフェ・コンセールと文芸キャバレー、あるいは労働者サークルといったシャンソンが重要な役割を果たした 3 つの異なるトポスにおいてどのような違いが見られるのか、といった新たな関心が芽生えるようになった。

異なるトポスにおける出版物とシャンソン

当時の出版物は、シャンソン歌手やシャンソンを聞かせる場所を紹介するに

あたって大きな役割を果たしたに違いない。新聞や雑誌は、大衆にカフェ・コンセールや文芸キャバレーの様子や、そこで歌っている歌手やシャンソニエを紹介し、大衆の興味をひき関心をそそることでそこに足を運ばせることに大いに貢献したことは想像に難くない。シャンソンスターの出現もマスメディアとしての出版物と深い関係がある。最初のシャンソンスターと見なされているテレザが有名になるのは 1863 年のことで、奇しくも大衆的日刊紙 *Le Petit Journal* が創刊された年でもある。カフェ・コンセールが娯楽の花形として隆盛を誇るようになると、上流階級の新聞をはじめ様々な出版物はこぞって人気歌手たちの舞台芸や私生活の逸話や醜聞について報じるようになる。

カフェ・コンセールの記事を主に扱った *Le Trombinoscope*, *Les Hommes du jour* といった個性的な新聞や、*La Lune*, *L'Eclipse*, *Le Sifflet* といったカリカチュア新聞などで連日報道される人気歌手たちの記事が人々の興味と関心をそそり、かくして芸能界のスターたちが誕生していく。上流階級の新聞 *Le Figaro* でさえ歌手たちの舞台裏や私生活の不謹慎な話題を遠慮なしに報じるようになる。カフェ・コンセール専門の新聞 *L'Echo des concerts* (1863-1860) も発行され、有名店「エルドラド」「アルカザール」「カジノ」などの特集記事を報じる。

一方、社会主義や無政府主義の信奉者や労働組合運動の推進者たちが、労働者を対象に発行していた *Le Père Peinard* や *La Guerre Sociale* といった別種の新聞においても、シャンソンは重要な位置を占めていた。初等教育の普及によって識字率が高まる中、新聞記事とシャンソンを合体させた新しいジャンルの新聞も誕生し、有名なシャンソニエのジュール・ジュイの時事的シャンソンを定期的に掲載した *Le Cri du Peuple* がセヴリーヌによって 1886 年から発行されるようになる。

また他方、19 世紀後半モンマルトルに次々に誕生して多くの人々をひきつけた「シャ・ノワール」をはじめとする文芸キャバレーも、いくつかはその店名

を冠した新聞を発行することになるが、そこでもシャンソンは重要な役割を果たした。これら文芸キャバレー発行の *Le Chat Noir*, *Le Mirliton*, *La Lanterne japonaise*, *Gazette du Bagne*, *La Lune Rousse*, *Les Quat'z'Arts* などの新聞においては、カフェ・コンセールを専門とする新聞に比べて、それほど厳しい検閲の目が光っていなかったとされる。

キャバレーの歌

キャバレーで歌われたシャンソンはカフェ・コンセールのそれとは異なっていた。照明をともなった華やかな舞台もなければ、きらびやかな衣装とも無縁であった。カフェ・コンセールで歌われるシャンソンの歌詞に対しては、その内容に応じて検閲済証印 *visa* を押すか押さないかを決めていたが、当時恐れられていたヴァロワ通りの有名な検閲官アドリアン・ベルンハイム *Adrien Bernheim* は、キャバレーの歌は見逃していた。それゆえキャバレーで歌っていた詩人兼シャンソニエたちは、ピアノ伴奏とともに彼らの書いたシャンソンを気兼ねなく歌うことができたのである⁶⁾。

キャバレーにやって来た客たちはシャンソニエたちの歌に喝采を送り、彼らが気に入った歌を何度も要求し、最後はその歌をみんなで合唱する光景もよく見られた。このようにモンマルトルを中心にキャバレーの歌が生まれ、人気のある歌はカフェ・コンセールの歌手たちにも取り上げられ歌われた。これらの歌は楽譜とイラストとともに廉価な紙に印刷された *petit format* や *grand format* (紙の大きさの違いによりこのように呼ばれた) として音楽出版社から、あるいは時としてシャンソニエ自身の手によって販売され広まった。

これらの歌ははじめ「シャ・ノワールの歌」*chanson du Chat Noir* と呼ばれていたが、カフェ・コンセールで歌われていたような軽薄な歌とは一線を画していた。それらはベランジェ *Béranger* やドゥブロー *Debraux* やデゾジエ

Désaugiers などの歌謡作者の系譜に連なる歌であり、およそ 100 人ほどの詩人や音楽家たちによって作られた質の高いシャンソンであった。詩人の詩に曲付けされた歌がしばしばシャンソニエたちによって歌われたが、とりわけ好んで作曲されたのは、テオドール・ド・バンヴィル、フランソワ・コペー、ポール・ヴェルレーヌ、ジャン・リシュパンなどの詩人であった。

これら「シャ・ノワールの歌」が取り上げたテーマは、時事問題（ジャック・フェルニー Jacques Ferny の「大統領訪問」*La Visite Présidentielle*、アンリ・フルスイ Henry Fursy の「普通選挙」*Le Suffrage universel* 等）、貧窮、社会の悪弊（イヴェット・ギルベールが歌ってヒットさせたザンロフ Xanrof の「辻馬車」*Le Fiacre* 等）、クリスマスの歌（ポール・デルメ Paul Delmet の「小さな教会」*La Petite Eglise* 等）、愛、そして地方の文化・伝統（ブルターニュ地方のテオドール・ボトレル Théodore Botrel、ボース地方のガストン・クテ Gaston Couté 等）などであった。そこでは、個性的な歌唱や言葉遊びや意識的な音の反復などが聴衆の耳を喜ばせ、とりわけ政府や教会に対する辛辣でふざけた茶化しや、皮肉やブラックユーモア（モーリス・マク＝ナーブ Maurice Mac-Nab の「胎児」*Les Fœtus* 等）を交えた歌が彼らを笑わせ人気を博したのである⁷⁾。

新聞『シャ・ノワール』について

科研費によって当時一世を風靡したモンマルトルの文芸キャバレー「シャ・ノワール」が発行した同名の新聞のリプリント版を入手することができた⁸⁾。他のキャバレー発行の新聞のお手本にもなったこの興味深い新聞は、店の雰囲気や余すところなく伝えると同時に、毎号載せられる風刺画によって当時の世相や時事問題や文化などを知る上でも貴重な資料である。19 世紀モンマルトル文化を専門とする歴史学者マリエル・オベルチュールの論考⁹⁾などを参考に、

この新聞の概要を紹介することにしよう。

この新聞は 1882 年 1 月 14 日 (土) に、店の開店後ほどなく創刊されたもので、当時のキャバレー新聞の中で最も長きにわたって発行された週刊紙である。途中短期間中断されたものの、本紙は 1895 年 3 月 30 日 (土) まで足掛け 13 年間にわたって 688 回も発行され続けたのである。編集主幹は店の創立者であるロドルフ・サリス Rodolphe Salis, 彼に協力して店を設立したイドロパット Hydropathes の領袖エミール・グドー Emile Goudeau が初代編集長を務めた。紙面のサイズ (フォリオ版四面) はドーミエ Daumier とシャルル・フィリポン Charles Philippon の『シャリヴァリ』*Charivari* をお手本にしており、副題は「面白いモンマルトルの機関紙」*Organe des intérêts de Montmartre* となっている。頁数は原則として 4 頁であり (創刊号など時に 6 頁のものも見受けられる)、紙面には詩、小話、連載小説、時評、広告などの他、株や裁判に関するニュースなども載せられている。そしてなによりも読者の目を引くのは、毎号載せられているデッサンや風刺画や戯画に他ならない。発行部数は、時期により変動があるが、12,000 部から 20,000 部の間で推移している。発行されたのは土曜日である。値段は 15 サンチームで、店の客にその場で販売されたり、フランス全土で予約購読されたり (パリでは年間 10 フラン、半年 7 フラン、地方では年間 12 フラン、半年 8 フラン)、街のキオスクで売られたりした。アドルフ・ヴィレット Adolphe Willette が「故ピエロ」*Feu Pierrot* の中で面白いエピソードを語っている。それによれば、キオスクで「黒猫ありますか？」*«Madame, avez-vous Le Chat noir?»* と言うと、もしそのマダムが褐色の髪の女性だった場合はなおさら、平手打ちを食らうこともあったという¹⁰⁾。

見出しの挿絵はアンリ・ピル Henri Pille によるもので、尻尾をぴんと立て毛を逆立ててムーラン・ド・ラ・ガレットを守っている雄の黒猫が描かれている。1 度だけフレデリック・ミストラル Frédéric Mistral に捧げられた 1884 年 5 月 24 日号だけは、ピルの別の挿絵「ルー・マタゴ」*Lou Matago* (モンマ

ルトルの丘の風車と太陽を背にして座っている黒猫)が使われている。

創刊号からすでに、店での詩人やシャンソニエたちの生の声や歌、あるいは熱を帯びた丁々発止の議論や文学談義などの雰囲気を活写した感のある記事や詩や時評などが、デッサンや漫画や風刺画などとともに掲載されており、本紙はその後文学サロンから締め出されたり、公式の官展から見放されたりした若きボヘミアン詩人や芸術家たちにもその門戸を広く開くことになるのである。

1882年1月14日(土)の創刊号の冒頭には、「モンマルトル」*Montmartre* と題されたジャック・ルアルディ Jacques Lehardy (「シャ・ノワール」の最初の常連の一人で、詩人クレマン・プリヴェ Clément Privé の偽名)の記事が載っている。そこでルアルディは、パリを訪れた旅行者がいかにもモンマルトルの丘の優位性に感服するか、モンマルトルが「世界の中心」*Centre du monde* であり、「人類の発祥地」*Berceau de l'humanité* であることを語っている。

一方、アケンピ A'Kempis ことエミール・グドーは、同紙の「発見の旅」*Voyages de découvertes* と題する記事において、旅行者をパリの至る所に案内すると、そこに窺われるのは政治的にも文化的にもモンマルトルの影響に他ならないことを述べている。グドーはまた同紙に「ポーランド人—ある叙事詩の断片—」*Les Polonais, fragment d'un poème épique* と題する詩を載せており、カルチエ・ラタンでイドロパット¹¹⁾というふざけ好きな *fumisterie* 詩人仲間を率いていた頃の精神を発揮して、葡萄酒と歌とが呼応していた時代を回顧している。

創刊号に描かれたサリスによる2枚のデッサンにもグドーの諧謔精神が表れている。グランヴィル Grandville に着想を得た最初のデッサンは「我々の演目」*Notre Programme* と題されており、下部には伝説と化した名句「もう動かないようにしよう！みんながここにやって来るから！」*« Ne bougeons plus! Tout le monde y passera! »* が記されている。そこに描かれているのは、モンマルトルの風車を背景にロバやアヒルたちを前にして、カメラのレンズキャップを手に持ち羽飾りの付いたつば広の帽子を被って直立した、写真家に扮した

黒猫である。黒猫は手を大きく広げ、モンマルトルからパリに向かってカメラを向けているかのようで、キャバレーの繁栄を誇示しているようにも思われる。

2枚目のデッサンは、下部に「さあほら、ミッシェル母さん、あんたの猫は迷子になんかなりはしないでしょう！」《*Allez, la mère Michel, votre chat n'sera pas perdu!*》という有名なシャンソンの歌詞が動詞の時制を現在形から単純未来形に変えて引用されている。これは「それはミッシェル母さん」*C'est la mèr' Michel*という1820年以降に広く知られるようになった俗謡¹²⁾で、サリスが引用している箇所は、いなくなった猫を心配して窓辺で嘆く彼女に、「リュステクリュ父さん」*Père Lustucru*¹³⁾が答えて言うせりふ「さあほら、ミッシェル母さん、あんたの猫は迷子になんかなってやしないさ。」《*Allez, la mèr' Michel, vot' chat n'est pas perdu.*¹⁴⁾》という部分の借用である。しかしこのデッサンが表している女性は、サリスをはじめ初期の「シャ・ノワール」の仲間たちが自分たちの守護聖女と称えたパリコミューンの女闘志ルイズ・ミッシェル *Louise Michel* に他ならない。黒猫の片手を左手でつかみ背後から右手で彼女の左の上腕部をわしづかみにしているビスマルクとおぼしき軍人に、刀を腰にさし怯むことなく踏ん張って直立する雄々しいルイズ・ミッシェルの頭の上には、聖人像に見られる光輪が描かれている。

このように週刊紙『シャ・ノワール』でひとときわ読者の興味をそそるのは、毎号3頁目に描かれるデッサンや漫画であり、おそらく購読者も毎回それを楽しみにしていたに違いない。本紙にデッサンを寄せたのはおよそ80名の画家たちであり、『シャ・ノワール』はカリカチュアの歴史や挿絵付き風刺新聞や当時の風俗を知る上で貴重な資料ともなっている。それらのデッサンを一瞥すると、それぞれの芸術家が自分たちの周りの世界をどのようにとらえていたのか、彼らの世界観を窺うことができる。本紙のデッサンを通して読み取れるのは、芸術家の苦悩と同時に19世紀末のフランス社会の悪弊や退廃や現実である。そこには多くの場合人間の営為の愚かさが辛辣に描かれている。それは愚行、

未熟、不倫、女性の不幸などであるが、同時に夫、妻、愛人の三者が演じる滑稽な喜劇、家庭の喜びや黒人への差別、軍隊生活、あるいは盲目的愛国心やブルジョワ生活など多彩な情景が描かれている。

この『シャ・ノワール』に連載された 19 世紀末のパリの風俗・風刺画は、本紙に収められたモノローグやシャンソンなどとも呼応しているが、まるでゾラが『ルーゴン=マッカール叢書』で描いた世界を視覚化しているかのようである。それらのイメージはわれわれ読者の想像力を掻き立て強力な喚起力をもって迫ってくる。ピエロを主人公にしたこま割りの漫画 (bande dessinée のさきがけ) などは、無声映画を見ているようで、そこに盛り込まれた奇想やユーモアによって思わず失笑せずにはいられない。各デッサンに添えられた言葉も味わい深いものがある。

デッサンを描いた画家の中でもとりわけ 3 人の名前が頻出する。アドルフ・ヴィレット Adolphe Willette, テオフィール・スタンラン Théophile Steinlen, カラン・ダッシュ Caran d'Ache である。それぞれが社会に対する自らのヴィジョンを独自のスタイルで表現している。ヴィレットはピエロを登場させ、スタンランは猫を描き、カラン・ダッシュは軍隊生活を得意とした。

『シャ・ノワール』に横溢しているのは、皮肉やからかいやひやかしの精神である。店の経営者サリス自らが本紙のことを「皮肉・冗談新聞」journal d'ironico-blogueur と呼びならしていたくらいである。至るところに悪ふざけや冗談が盛り込まれており、キャバレーの陽気な雰囲気伝わってくるようである。左岸のカルチエ・ラタンでイドロバットの陽気なメンバーとして知られ、初期から『シャ・ノワール』に関わることになる奇人サペック Sapeck もまた、モンマルトルに彼特有の奇想天外で陽気な悪戯を持ちこむことになる。店に客を呼び込もうとして仕掛けた、サリスのピストル自殺を伝える虚報と偽の葬儀の芝居を思いついたのもサペックに他ならない。このブラックユーモアを利かした悪ふざけの記事が出たのは、1882 年 4 月 22 日号においてである。「訃報」

*Un deuil*と題する偽の訃報記事を書いたのはアケンピ A'Kempis という偽名を使っていたエミール・グドーであった。それによると、元氣澁刺だったサリスが悲嘆にくれピストル自殺を図ったのは、ゾラに自分のアイデアを剽窃されたからだという。発見された遺書には、「もはや生きていけない！ゾラが『家庭料理』の中で私のアイデアを盗んだからだ。これでユゴーの正当な後継者たる国民的詩人になる夢が断たれてしまった。あの世に旅立ちます。」《*Je ne puis survivre ! Zola dans Pot-Bouille, m'a volé l'idée qui devait faire de moi le poète national, digne héritier de Hugo. Je parts.*¹⁵⁾》と書かれていたという。追記には、葬儀は月曜日の午後2時から執り行われるので、参列者はキャバレーに参集されたい、詩人と音楽家には追悼詩編（曲）*psaume funèbres* を用意願いたい旨記されている。末尾には髑髏のデッサンが添えられており、なかなか手の込んだ演出がなされている。

ポール・スデー Paul Souday の回想¹⁶⁾によると、この悪ふざけを思いついたのはサベックだという。偽の葬儀当日の月曜日は、キャバレーの扉に「国喪のために開店」《*Ouvert pour cause de décès national*》という掲示が貼られ、鎧戸は閉じられ、店内には黒幕が張られ、複数のローソクが灯されていた。黒のサージで覆われた架台の上にチェロと棺が置かれ、その傍らに修道女に扮した画家シニャック Signac が跪いていた。椅子の上には髑髏が置かれており、コップを洗う棒ブラシが水で満たされたお椀の中に浸してあった。騙されているとも知らず啞然とする来客たちに向かって、葬儀長に扮したデショーム Deschaumes が「その水をふりかけなさい」と冷淡な調子で言っていたという。まさにドッキリカメラよろしく、この大がかりな人を担いだ茶番劇の最後にひょっこり死んだはずのサリスが姿を現し、参列者たちに会釈したというのだから、騙されたとはいえ、さぞかしそこに居合わせた人々は仰天したことであろう。

このような悪戯や奇想天外な企ての傍らで、本紙には偉大な詩人の作品や世

間にまだ知られていない作家や忘却の彼方に追いやられてしまった作家たちの作品も分け隔てなく掲載されている。週刊紙『シャ・ノワール』は、1880年代から1890年代にかけて様々な文学的・芸術的流派や傾向が勃興する中、いかなる傾向や流派にも与することなく良いと思ったすべての作品を許容した雑多な精神こそが、何ものにも代えがたいその豊穡さを作り上げているのではなからうか。

その他のキャバレーが発行した新聞

モンマルトルに次々に誕生した「シャ・ノワール」以外の他のキャバレーでも、週刊紙『シャ・ノワール』を真似てそれをお手本にして多くのキャバレー新聞が発行されるようになる。

アリスティッド・ブリュアン *Aristide Bruant* のキャバレーで発行された『ル・ミルリトン』 *Le Mirliton* は、もっぱら彼が店で歌うシャンソンを広く世間に広めるための媒介の役割を果たした新聞であるが、『シャ・ノワール』の影響もそこには窺える。キャバレー「ル・ミルリトン」は、サリスが1885年6月に手狭になったため「シャ・ノワール」をラヴァル通り *rue de Laval*（現在のヴィクトール・マッセ通り *rue Victor-Massé*）のより広い建物に移転した跡地（ロシュシュアール大通り 84 番地）をブリュアンが手に入れ改装して作った店である。ブリュアンの罵倒芸に関しては、鹿島茂の『モンマルトル風俗事典』¹⁷⁾に詳述されているのでそちらを参照されたい。

新聞『ル・ミルリトン』には、ブリュアンのシャンソンが優先的に掲載されたが、ザンロフ *Xanrof*（本名 *Léon Fourneau* をラテン語に戻して *Fornax* とし、それを逆さまにした偽名）のシャンソンや、アルフォンス・アレーの小話なども載せられている¹⁸⁾。本紙は4面構成で、1面にはカラーないしは白黒のリトグラフィーによる挿絵が印刷されている。挿絵を描いたのは、由緒ある貴

族の末裔で家族にキャバレー新聞の挿絵を描いていることを知られたくなかったため、トレラゼ Trélazé やトレクロ Tréclau といった偽名を隠れ蓑にしていたトゥールーズ＝ロートレック Toulouse-Lautrec, 同じくジャン・カイユー Jean Caillou という偽名を使っていたスタンラン Steinlen, アンリ・ピル Henri Pille, ユゼス Uzès, フォラン Forain などである。

最初はかなり不定期にはあったが月 1 回のペースで発行され、その後 1885 年から 1894 年までは週刊紙として毎週金曜日に発行され続けた。本紙の値段は 1 部 10 サンチームで、『シャ・ノワール』(15 サンチーム) より若干安かった。定期購読の場合は、フランス国内が 1 年間 6 フラン, 6 か月 4 フラン, 3 か月 3 フランであるのに対し、外国の場合は 1 年間 10 フラン, 6 か月 6 フラン, 3 か月 4 フランという値段設定であった。1895 年にブリュアンが彼のキャバレーをマリウス・エルヴォション Marius Hervochon に売却し本紙は廃刊となった。

「オリーヴの詩人」と呼ばれたジャン・サラザン Jean Sarrazin¹⁹⁾は、キャバレー「ディヴァン・ジャポネ」Divan Japonais において『ラ・ランテルヌ・ジャポネーズ』*La Lanterne japonaise* という文芸新聞を発行するが、本紙は 1888 年 10 月 27 日から 1889 年 4 月 20 日までの半年間でわずか 16 号までしか発行されなかった。この新聞は『シャ・ノワール』を模倣しており、発行日も土曜日であり、1 面にはジョルジュ・オリオール George Auriol の日本趣味を取り入れた挿絵が掲載された。この挿絵からも窺えるように、キャバレー「ディヴァン・ジャポネ」及び本紙『ラ・ランテルヌ・ジャポネーズ』は、当時の美術界に大きな影響を与えつつあったジャポニズムを公に支持しているのが分かる。紙面にはジャン・サラザンの作品や、ヴェルレーヌやシャルル・クロスの詩などが掲載されており、また 4 面にはその週に催される各種の興業が紹介されていることから、「ディヴァン・ジャポネ」は「シャ・ノワール」や「ル・ミルリドン」と比べると、どちらかというとかフェ・コンセールよりのキャバ

レーであったことが分かる。イヴェット・ギルベールがムーラン・ルージュで歌った後、このキャバレーにやって来て歌ったことがその証左である。

その他、パリコミューンの闘志として戦い流刑地で過酷な体験をして戻ってきたマクシム・リスボヌ Maxime Lisbonne が開いた「流刑地の居酒屋」Taverne du Bagne が発行した『ガゼット・ド・バーニュ²⁰⁾』 *Gazette du Bagne* や、版画家シャルル・ジャック Charles Jacque のエッチングを広めるために開店した「ラ・ロシュフーコ」La Rochefoucault で発行された『ラマトウール²¹⁾』 *L'Amateur* といった新聞などは、いずれも短命に終わっている。

おわりに

以上見てきたように、キャバレーで発行された新聞によってモンマルトルの活発な文芸・芸術活動の実態が多く読者に伝えられたことで、人々はこぞってモンマルトルの文芸キャバレーに足を運ぶようになる。かくしてモンマルトル神話なるものが作り上げられていく。その中でも『シャ・ノワール』が果たした役割は絶大である。サリスが性格付けしたように皮肉と冗談を満載し、デッサンの効果を最大限生かし、偉大な作家であるなしを問わず無名の作家や忘れ去られた多くの芸術家や作家にも門戸を開き、表現の自由をとことん追求した本紙は、『ラ・リュヌ・ルース』 *La Lune Rousse* や『レ・キャッツァール』 *Les Quat'z'Arts* といった他の多くのキャバレー新聞に模倣されはしたが、他の追随を決して許すことはなかった。本紙が示したお手本により、表現の自由と諧謔とユーモアの精神がやがてモンマルトルの精神と見なされていくのである。それは今日でも変わることなく、脈々と受け継がれている精神であることは確かである。

註

- 1) Bertrand Bonnieux, Pascal Cordereix, Elizabeth Giuliani, *Souvenirs, souvenirs... Cent ans de chanson française*, Bnf, 2004 及び *La chanson française*, Revue de la Bibliothèque nationale de France N° 16, 2004 参照。
- 2) 例えば筆者がリモージュ大学を訪れた際、西洋古典文学の泰斗ルヴェ教授から紹介された Maria Spyropoulou Leclanche, *Le refrain dans la chanson française de Bruand à Renaud*, Presses Universitaires de Limoges, 1998 などが挙げられる。彼女は 1962 年にギリシャのアテネ近郊の港町ピレウスに生まれ、アテネ大学でフランス文献学を修め、プロヴァンス大学で言語学の博士号を取得、「学際的シャンソン研究セミナー」*Séminaire interdisciplinaire de la chanson (S.I.C.)* の設立にも深く関わり、リモージュ大学附属「民衆文学研究センター」にも参画し、現在フランスにおいて活躍するシャンソン研究者の一人である。
- 3) Dominique Kalifa, Philippe Régnier, Marie-Eve Thérénty, Alain Vaillant (dir.), *La Civilisation du journal. Histoire culturelle et littéraire de la presse française au XIX^e siècle*, Nouveau Monde éditions, 2011 参照。
- 4) 小倉孝誠, 『挿絵入新聞「イリュストラシオン」にたどる 19 世紀フランス夢と創造』, 人文書院, 1995 参照。
- 5) 本研究誌第 5 号所収「パリの文芸キャバレー跡 (1945-1965) 調査」, 吉田正明・三木原浩史共編, 2013, 及び吉田正明「ベルエポックとシャンソン—カフェ・コンセルのスターたち—」(『広島大学フランス文学研究』31 号, 2012 参照。
- 6) リヨン第 2 大学客員研究員, オルセー美術館芸術顧問, モンマルトル美術

館学芸員などを歴任した 19 世紀後半パリのキャバレーやシャンソニエを専門とする歴史学者マリエル・オベルチュールによると、19 世紀後半の文芸キャバレーの歌に対しては、カフェ・コンセールの歌が受けていた検閲とは異なる対応がなされていたという。キャバレーで歌われていた歌は当時の検閲官からは民衆にとってそれほど危険なものとは見なされていなかった。それゆえシャンソニエたちは事前に許可を求める必要がなかった。彼らは作りたての自作のシャンソンを気兼ねなく即興を交えてキャバレーで自由に披露することができたのである。この検閲免除は 1897 年 4 月 4 日にカフェ・コンセール同様キャバレーの歌に対しても検閲を義務付けた法令が制定されるまで続いた。この法令が撤廃されたのは 1906 年 4 月のことである。なお、当時出版物や演劇などの検閲は、Anastasie と呼ばれた大ばさみを持った醜悪で気難しい老婆の姿で象徴された。この女性名は anastasia「めちやくちやにする」という意味のギリシャ語に由来している。Mariel Oberthür, *Le rôle des journaux de cabarets, 1870-1905*, in *Presse, chanson et culture orale au XIX^e siècle, la parole vive au défi de l'ère médiatique*, dirigé par Elisabeth Pillet et Marie-Eve Thérenty, Nouveau Monde édition, 2012, p.135 参照。

- 7) 「シャ・ノワール」に関わった詩人や作家たちについては、*Les Poètes du Chat Noir*, Présentation et choix d'André Velter, Poésie / Gallimard, 1996 を参照されたい。アンドレ・ヴェルテルの詳しい序文の他、エミール・グドーの回想やジョルジュ・オリオールによるロドルフ・サリスの人物描写も付されている。そこに収められているのは、件のキャバレーに関わった作家や芸術家やシャンソニエたちの作品であり、登場順 (par ordre d'entrée en scène) に計 65 人が紹介されている。以下、主だった作家をピックアップしてみると、Aristide Bruant, Alphonse Allais, André Gill, Maurice Rollinat, Edmond Haraucourt, Jean Lorrain, Jean Moréas,

Marie Krusinska, Jules Jouy, Charles Cros, Verlaine, Jean Richepin, Albert Samain, Germain Nouveau, Maurice Mac-Nab, Maurice Donnay, Villiers de l'Isle-Adam, Mallarmé, Vincent Hyspa, Léon Xanrof, Gabriel Montoya, Francis Jammes, Raoul Ponchon, George Auriol, Lautrec, Jehan Rictus, Erik Satie など多彩な詩人やシャンソニエや音楽家たちが関わっていたことが分かる。

- 8) *Le Chat Noir*, Volume I, Numéros 1 à 207 (1882-1885), Volume II, Numéros 208-415 (1886-1889), Volume III, Numéros 416-572 (1890-1892), Volume IV, Numéros 573-688 (1893-1895), Slatkine Reprints, Genève, 1971.
- 9) 註 6)及び Mariel Oberthür, *Le cabaret du Chat Noir à Montmartre (1881-1897)*, Edition Slatkine, Genève, 2007 参照。
- 10) Adolphe Willette, *Feu Pierrot*, Paris, H. Floury, 1919, p.118 参照。
- 11) 水治療法派 les hydropathes は、「イドロパット」*L'Hydropathe* 紙を中心に 1878 年にパリで結成され、リーダーのエミール・グドーがロドルフ・サリスに協力してモンマルトルの「シャ・ノワール」に移ったことで、1881 年頃に解散したデカダンの傾向の詩人グループ。水治療法派とは実は「酒を愛し水を毛嫌いする」精神の諧謔に富む命名である。
- 12) この歌詞の作者は知られていないが、この歌のメロディーが作られたのは 17 世紀に遡る。なぜならルイ 14 世の最も優れた隊長の一人で兵士たちからも崇められていたカティナ元帥 Maréchal Catinat が、1693 年ラ・マルサイユ La Marseille の戦いでサヴォワ公爵に勝利したときに作られた「カティナの行進曲」*La Marche de Catinat* (正式名称は *Ah ! si vous aviez vu Monsieur de Catinat*) で使われた曲であることが知られているからである。その後このメロディーはいくつかの行進曲 (*Grand Duc de Savoie, à quoi penses-tu ?* や *Adieu donc, cher La Tulipe* 等) にも使用さ

れている。他方、歌詞の中に出てくる「ミッシェル母さん」*La Mère Michel* は 19 世紀中葉、ギニョール人形劇の登場人物にもなっている。また、1853 年に著された『歌のお年玉』*Etrennes Chantantes* の中に彼女とイザンバール医師 *docteur Isambart* との対話が収められていたり、同時期に書かれた子供向けの本では「ミッシェル母さん」と「リュステュクリュ父さん」*Père Lustucru* とのいざこざが物語られたりしている。このシャンソンのテーマはその後度々取り上げられ、子供たちを大いに喜ばせるささやかなコメディとして定着することになる。Martine David, Anne-Marie Delrieu, *Aux sources des chansons populaires*, Librairie Classique Eugène Belin, 1984, pp.74-75 参照。

- 13) この *Lustucru* という変わった名前は音による言葉遊びからきており、「そんなこと本当に信じたのか？」《*L'eusses-tu cru ?*》を振ったものであり、17 世紀のシャンソンにすでに登場している。前掲書 Martine David, Anne-Marie Delrieu, *Ibid.*, p.75 参照。
- 14) *Le Premier Livre des chansons*, Texte de Pierre Chaumeil, Illustration de Roland Sabatier, Gallimard, 1984, pp.24-25 参照。
- 15) *Le Chat Noir*, Volume I, Numéros 1 à 207 (1882-1885), Slatkine Reprints, Genève, 1971 参照。
- 16) Paul Souday, 《*Le Chat Noir, raconté par Rodolphe Salis*》, *Le Temps*, 15 janvier 1896 参照。
- 17) 鹿島茂『モンマルトル風俗事典』, 白水社, 2009 年, pp.156-168 参照。
- 18) 『ル・ミルリトン』の第 1 シリーズは 1885 年 10 月 1 日の創刊号から 1893 年 3 月 10 日の第 100 号まで, 第 2 シリーズは 1893 年 3 月 17 日の第 101 号から 1893 年 12 月 29 日の第 142 号まで発行された。1894 年 1 月 5 日には再び第 1 号とし 1894 年 10 月 1 日の第 30 号まで発行され, 最後に新シリーズとして 1894 年 11 月 15 日の第 1 号から 1894 年 12 月 15 日の第

12号まで発行され廃刊となった。*Le Mirliton*, Bibliothèque nationale de France, Arts du Spectacle, Fol-Ro-15263.

- 19) ジャン・サラザンは彼のキャバレー「ディヴァン・ジャポネ」の入り口に座って、来客者に膝の上の桶からオリーブを配って渡していたことから、「オリーブの詩人」*poète aux olives*と愛称された。
- 20) 『ガゼット・ド・バーニュ』*Gazette du Bagne*は『シャ・ノワール』に倣って4面で構成され、10センチメートルで毎週販売されたが、発売されたのは1885年11月のみでわずか5号で廃刊となった。
- 21) 『ラマトゥール』*L'Amateur*は最も独創的な新聞であったが、1890年10月15日から1891年1月15日まで隔週で発行され、7号で廃刊となっている。

本稿は、科学研究費補助金による研究課題「文芸キャバレーにおける文学とシャンソンの影響関係」（平成25～27年度基盤C，研究代表者：吉田正明，研究分担者：三木原浩史）の研究成果の一部として発表したものである。

（よしだ・まさあき：信州大学人文学部教授，研究テーマ：19世紀フランス詩・シャンソン文化史）